

祖父から教わった大切なこと

鏡野町立鏡野中学校

一年生 小山 裕莉愛

野菜作りの名人だった祖父が入院して亡くなるまでの間、私は祖父の畑を見ることができずにいた。しばらくたって畑を見に行ったら、草がたくさん生えていた。野菜も太陽の光を浴びて、口をぽかんと開けてしまいうくらい大きくなっていった。祖父が今まで頑張って野菜を作っていた証のようで、涙があふれさそうだった。

祖父はジャガイモやナス、キュウリ、里芋、白菜など、季節に合わせた野菜を作って、私たちに食べさせてくれた。おかげで苦手だった野菜も、今は食べられるようになり、好き嫌いがなくなった。特に私が好きだったのはトウモロコシだ。太陽の光と祖父の愛情でぐんぐん育ったトウモロコシは、甘くて優しい味だった。そんな祖父が作る野菜がもう食べられないと思うと、切ない気持ちでいっぱいになった。

私と兄が小さい頃、祖父に野菜の植え方や育て方を教えてもらうため、よく畑の手伝いをさせてもらっていた。一番よく覚えているのが、シイタケの育て方だ。一般の野菜と作り方が違い、シイタケは、木に丸い穴を開け、その穴にシイタケの菌を固めたものをはめて、トンカチで叩くという作り方だった。最初、私は、「あんな作り方で本当にしいたげができるのかな。」と不思議に思っていた。しかし、数日たって、祖父の家に行く時、祖父が以前植えていた別の原木にシイタケができていて、思わず

「ええっ。」

と声を出してしまった。

こんな思い出もある。ある夏の日、畑仕事の手伝いがようやく終わり、もう太陽が西に差しかかる頃、祖父が、

「ちよつとここで待って。」

と言って、車でどこかへ行ってしまった。私と兄は、畑の近くに座って待っていた。でも、祖父が帰ってくる気配はなく、「おじいちゃん、どこに行ったんだろう。」と不安になって立ち上がったその時、祖父の車が見えた。車から降りてきた祖父は、私たちにアイスクリームを渡してくれた。夕暮れを前に食べたアイスクリームが、いつも以上においしかったことを今でもしっかり覚えている。

これは、祖父から教えてもらった豆知識だ。苗を植える前に

やっておいの方がよいことがある。それは、苗を植える当日の朝に、苗に水をやっておくことだ。前もって水をやっておくことにより、ポットから苗を出すときに土が崩れなくなり、根の付き具合もよくなるそう。祖父の車の中から、生前植えようと思っただけ集めていたらしい種が出てきた。祖母が、

「サツマイモ植えたいけん、手伝って。」

と言ったので、私と兄は、

「はい。」

と言って、苗を植えるときに必要なマルチと、マルチ穴あけ器とスコップ、じょうろを持って畑に向かった。祖母はずっと仕事をしていたので、畑仕事をしたことがない。懐かしい土の匂いに、私の頭には、小さい頃に見た祖父の姿が浮かんできた。

サツマイモは、小さい頃植え方を教えてもらったので、大体のことは知っている。まず、深く耕し、畝を高めにして、黒色のマルチを張る。最初、私と兄は、マルチを下に置いて張っていた。すると、祖母が、近くにあって鉄の棒を持ってきて、

「こうすれば早くできるかもしれん。」

と、マルチの心棒の丸い空洞に鉄の棒を入れた。鉄の棒を持っておくだけで、するとマルチを早く張ることができた。次に、三十センチ間隔で、穴あけ器でマルチに切れ目を入れ、苗を水平に寝かせる。そして、風でマルチが飛ばされないようにTの字のピックを差した。苗の葉の部分がすべて見えるように

浅く埋める。周りの土をふんわりと乗せて、最後に水やりをする。汗がたくさん出て、とても大変だった。水やりをし、肥料をやったり、害虫対策をしたり……、これを毎日一人でするのは大変だ。祖父はこんな暑さにも負けず、一人で野菜を育て、私たちに食べさせてくれていたんだなと思うと、感謝の気持ちでいっぱいだった。同時にもっと畑の手伝いをして、まだ育てたことのない野菜の植え方を教えてもらいたかったなとも思った。

今、私は祖父に教えられた知識を使って、自分の畑が作りたいたいと始めている。理由は三つある。一つ目は、一人で世話をすることで祖父の大変さがわかると思ったからだ。二つ目は、まだ育てたことのない野菜を、植え方から育て方まで一から調べて、自分の力でだけ作ってみたいと思ったからだ。一生懸命育てた野菜ができた時は、きつとドキドキ感と達成感を感じられるはずだ。三つ目は、そうすることで祖父が一番喜んでくれると思うからだ。

祖父は帰らぬ人となってしまったが、私の胸の中に、祖父はいる。祖父が教えてくれた「支えられてきたからこそ、今の自分がいる」ことを大切に、祖父の分まで生きようと思う。